偉大なる魔法使いと戦姫

フリーク

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新世界での冒険から数年後…ネギの元に再び超が現れ、とある協力を求めてやってくる…　更新速度はかなり遅いです

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 8

第1話

「ふ～、やっと終わった～」

部屋の主が痙った背筋の筋肉を伸ばすように、背伸びをした。

彼の名はネギ・スプリングフィールド

数年前に起こった事件を解決に導いた白き翼（アラアルバ）のリーダーであり、

「Ｂｌｕｅ Ｍａｒｓ計画（プロジェクトブルーマーズ）」を考えた第一人者だ。

今ではその計画も軌道に乗り、以前に比べてだいぶ穏やかな毎日を過ごせている。

ーこんな日がずっと続けばな

そんな事を考えてしまいがちだが…

「ちょっと入るネ、ネギ坊主!」
　こういう時は必ず騒動がやってくるものだ。
「どうしたんですか? 超(チャオ)さん」
「これを見るネ!」
　差し出されたのは、懐中時計に似たものだった
「これって…航時機(タイムマシン)『カシオペア』ですか?でも少し違うし、どっちかというと渡界機に似てますよね?」
「そうネ、これは並行世界じゃなくテ、異世界に行くネ」
「へ〜そうなんですか〜…って、本当ですか!?」
　さらっとスゴいことを言われた為慌てて聞き直す
「そうネ。一度使ってみたケド、転移場所の環境の文化レベルが違いすぎたから、そう判断したネ」
　思わず唖然とした

「自分で使ったんですか…？」
「あたりまえネ、それで相談があるネ」
「え…。それってまさか」
「この異世界に行って、調査してきて欲しいネ」
「やっぱりですか！」
　何となくの嫌な予感が当たった…そんな事をネギは考えた…
「それでどうするネ、ネギ坊主？」
「わかりましたよ、超さん」
「ありがとネ、それじゃあコレ、ハイ」
　超がネギに何かを投げた
「これって…僕の魔法発動媒体の指輪？」
「そうネ、それに加えて何でも入れれる収納機能も搭載してるネ」
「それはすごいですね、それじゃあ何か必要なものを色々入れてきます！」
◆◇◆◇◆
「ほんと、何でも入りますねコレ…」
　戻ってきてそうそうネギは言った
「アスナ達には言ってきたネ？」

「はい、一応」
「それじゃあ行ってらっしゃい」
渡界機を作動させ、少年は、部屋から消えた…

◆◇◆◇◆
気づくと僕は草原に上に立っていた
眼下には街があり、その近くには多少質素とも言えるが、城とも言える大きな建物があった。
「さて、城下町で聞き込みする前に…」
僕は超さんから貰った指輪からのどかさんに貰った、魔神の童謡（コンプティーナ・ダエモニア）と、読み上げ耳（アウリス・レキタンス）を身に着け、相手の考える事を分かるようにして城下町へと向かった。
◆◇◆◇◆
城下町に住んでいる住人の話を繋げていくと、ここはレグニーツァ公国という国で、ジスタートの七戦姫に一人、アレクサンドラ＝アルシャーヴィンが治めているのだという。
ジスタートの七戦姫というには、昔、３０ほどの小部族がこの地の覇権を競う中、「黒竜の化身」を称する男が突如として現れ、我を王として従えば勝利を約束するとした彼

に七つの部族が従った。
そして彼は服従の証として、各部族から捧げられた女性に竜具を与えて七戦姫とし、宣言通りに周辺部族を平定しただけでなく、周辺諸国をも滅ぼしてジスタート王国を建国し、その初代国王となった…だそうだ
今でも小競り合いはある様だが大きな戦争はあまり起こっていないようだ。
やっぱり平和が良いな～って考えていると、不穏な声が聞こえてきた。
（…ガキどもは沢山捕まえた…あとはコイツラを売れば…）
声が聞こえてきた方向を見ると、いかにもガラの悪そうな男達がいた。
するとその中のに一人と目が合い、奴らは走って逃げてった。
「おい、待てッ！」
◆◇◆◇◆
僕は少し気晴らしに外を見ていた。
いつもどうりの城下町
だけど今日は何故か、変な感じがする
僕の竜具（ヴィラルト）のバルグレンも何か騒いでる
その違和感を確かめるように城下町を見つめると騒がしい所が合った
そこでは複数の男性を一人の男性が追いかけていた。

「君が気になっていたのは、彼らかい？」
竜具を撫でながら聞いてみると肯定を示すように双剣の炎が揺らいだ。
よし、ちょっと調べてみようかな…
僕が寝ていたベットに仕掛けをして、王宮を抜け出した。
◆◇◆◇◆
僕が町に着くと彼らはまだ追いかけっこをしていた
周りの人も何かの催し物だと思ってるのか、ヤジをとばしていた
すると追いかけていた方の彼が立ち止まった
諦めたのかと思ったら何かを唱え始めた
「ラ・ステル　マ・スキル　マギステル　風精召喚（エウオカーディオ・ウアルキュリアール）剣を執る戦友（コントゥベルナーリア・グラディアーリア）!!
捕まえて（アゲ・カピアント）」
すると彼の周りに分身が現れた
これには僕も含め、みんな驚いていた
しかし、そんな事を気にせんとばかりに、彼らは逃げてった男達を捕まえていた
その手際の良さに僕は凄く驚かされた
そして彼はその内の一人に何か質問していた
「我　汝の（アナタのオナマエ）　真名を問う（ナンデスカ）」

指を指しながら聞くと

「なるほど　わかりました。ガレスさん、誘拐した子供たちはどこにいますか?」

その質問に僕らは驚いた

何故彼はそんな事を知っているのかと…

そんな事を考えていると、

「すみません、あとで誰か衛兵に伝えてください。『郊外の南の森３５００アルシンの所に子供がいる』と」

そう言い残すと、彼はその場から飛び屋根の上を走ってった…

彼は一体何者なんだろう…

疑問にある中、心の奥底に眠っていた筈の気持ちが動き出した事にまだ僕は気づいていなかった…

第2話

ーその後僕は郊外の森を飛んでいた
ここから３５００アルシンの所にいると、言っていたがその１アルシンが何メートルかが解らないのがな…
一応地図を考えてもらったから大丈夫だと思うけど…
それにしても、あの場で魔法使ったのはダメだったかな…？
多分必要以上に注目を集めてしまったし、どこからか変な視線を感じたし…
何も起こらなければ良いんだけど…
◆◇◆◇◆
しばらくすると、小さな小屋が見えてきた
周りには、三人程の見張りがいるみたい
中には、攫われた人と盗賊がいた
さて、早めに終わらせるか
◆◇◆◇◆
三人称Ｓｉｄｅ

小屋の中では、恐怖が渦巻いていた
盗賊の表情からは、ゲスな顔が浮かんでいた
誰もが目を瞑り恐怖に耐えていた
バタッ…
外から何かが倒れた音がした
盗賊達は怪訝そうに外を見に行った
しばらくすると、悲鳴や、怒号が聞こえたが直ぐに止んだ
扉がゆっくりと、開く
開けた所から、陽が入り中が照らされた
「キミ達、大丈夫?」
そんな声をかけてきた男の人が居たが、逆光のせいで顔がよくわからなかった
…でもその人は優しそうな表情をしていた
そんな事を兵士の人達が来るまで考えていた…

◆◇◆◇◆
ネギＳｉｄｅ
ふぅ～、危なかった…

助けたのは良いけど、直ぐに兵士が来たから慌てて逃げてたからなぁ…
多分あの子達には顔見られたし、直ぐにバレるだろうだしな…
…しょうがない、アレを使うか…
大方バレる可能性は低いし、少なくともさっきから感じる視線を誤魔化す事はできるだろう
よし、路地に入ったら使おう！
そして、路地に入ったら僕の手元には、瓶詰めのアメがあった
◆◇◆◇◆
???Ｓｉｄｅ
あれ～おかしいな…
さっき彼が戻ってきたから後をつけてた筈なんだけど…
路地の所で見失ったみたいだ
う～ん、どうしよう…
そんな事を考えていると、僕が見つめる先に丸い小さな玉のような物があった
近づき確かめると飴玉だった
手で持ち光に透かすように見ていた
しかし、アメに気を取られつい躓いてしまい、手にあったアメはキレイに放物線を描

き僕の口に、入ってしまい反射で飲み込んでしまった…
「どうしよう…」
多分害は無いだろうけど僕の身体のこともあるからな…
一度城に戻ろう
そう結論づけ、路地を出ようとすると足に何かが引っかかっていた
そこでやっと気付いた
いつの間にか僕の身体は小さくなっていた
視線は低くなり身に着けていた服も、ブカブカになっていた
「なっ、ナニコレーーー!」
小さいながらも大きな声が、出てしまった